

[Material]

Trends and Issues in Research on Medical Safety Education in Basic Nursing Education

Reiko Nakano* and Ayumi Nishigami*

* Aino University

Abstract

The purpose of this study is to clarify the trends and issues of research on medical safety education in basic nursing education through domestic literature. The literature was searched using the Web version of the Central Journal of Medicine using the keywords “medical safety” and “nursing education,” and finally 28 references were extracted that focused on nursing students as the research subjects.

From the analysis of the results, they were classified into 10 categories of 5 themes: “evaluation of medical safety exercises”, “awareness and recognition of medical safety”, “analysis of incident reports”, “medical safety behavior”, and “risk sensitivity”. Of the 10 categories, the most frequent were <role play> (7 cases), <change in awareness with grade progression> (4 cases), and <analysis of incident reports> (4 cases).

Many of the studies on the evaluation of medical safety exercises aimed to lead to students’ risk prediction and risk avoidance behaviors, and students had more opportunities to be involved in incident cases through their practical training experience, and their interest and awareness of medical safety increased. It is necessary to consider the ideal way of education that will translate to more practical medical safety behavior in the future.

Key Words : basic nursing education, nursing student, medical safety education

看護基礎教育における医療安全教育に関する研究の動向と課題

中野玲子*, 西上あゆみ*

【要 旨】

本研究の目的は、国内の文献を通して、看護基礎教育における医療安全教育の研究の動向と課題を明らかにすることである。文献は、医学中央雑誌 Web 版を用いて、「医療安全」「看護教育」をキーワードに検索を行い、最終的に看護学生を研究対象とした 28 文献を抽出した。

結果内容の分析から、医療安全に関する演習評価および、看護学生の医療安全に対する意識・認識、インシデントレポートの分析、医療安全行動、リスク感性の 5 テーマ、10 カテゴリーに分類された。10 カテゴリーのうち件数が多かったのは、ロールプレイ 7 件、学年進行による意識の変化 4 件、インシデントレポートの分析 4 件であった。医療安全に関する演習評価は、学生の危険予知やリスク回避行動につなげることを目的とした研究が多く、学生は実習を経験することによりインシデント事例に関わる機会も増え、医療安全への関心や意識が高くなっていた。今後さらに実践的な医療安全行動につながる教育のあり方を検討する必要がある。

キーワード：看護基礎教育、看護学生、医療安全教育

緒 言

1999 年、横浜市立病院手術患者取り違え事故を契機に、日本での本格的な事故防止対策および医療安全活動が始まり、2004 年、厚生労働省「新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会」報告書に、看護技術としての医療安全の確保と看護管理における安全管理の重要性が提起され、医療安全教育に関する検討が開始された。2009 年、保健師助産師看護師学校養成所指定規則が改正され、統合分野として「看護の統合と実践」が設けられ、教育内容として医療安全の基本的知識の習得が明文化された。また、2011 年には、文部科学省および厚生労働省における検討会報告書に「安全なケア環境を提供する能力」の育成が提案され、医療安全および感染防止に関する 3 つの卒業時の到達目標が示され 10 年が経過した。

看護基礎教育では、一つひとつの看護技術や看護過程の展開など、看護を実践するどの過程においても、対象の安全を最優先する教育が重要である。そのための教育内容として、臨地実習前の学内では認知レベルの学修を行い、その後、臨地実習において受け持ち患者の看護過程の展開を通して、実践レベルでの医療安全行動を習得していく。そして卒業時には、医療事故防止対策について理解し、そのために必要な行動をとることができるという実践力が求められている。

著者は基盤看護分野の統合看護学領域を担当し、医療安全に関する講義を行っている。これらの講義の準備段階で、2018 年日本看護系大学協議会の作成した卒業時到達目標、厚生労働省 (2004) 「新人看護職員研修ガイドライン」、日本看護協会 (2016) 「医療安全推進のための標準テキスト」、および複数の出版社の医療安全テキストなどを参考に、講義目標や評価方法

* 藍野大学

などを模索し講義を組み立てた。そしてここ2年間、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、学生は実践レベルで医療安全を学ぶ貴重な体験が少ないまま卒業していく現状において、看護の対象の安全を最優先に考え行動できるための医療安全教育はどのようにあるべきなのか検討したいと考えた。

そこで、本研究は、看護基礎教育における医療安全教育に関して、看護学生を対象にどのような研究がされているのかその内容を明らかにし、医療安全教育の今後の課題を示すことを目的とした。

I. 研究方法

1. 検索方法および対象文献の選択

データベース医学中央雑誌 Web 版を用いて、「医療安全」「看護教育」をキーワードに、過去5年間の原著論文に限定して検索した結果、138件が抽出された(2021年10月13日現在)。文献の選択条件は、「看護学生を対象としていること」「看護基礎教育における医療安全を主題にしているもの」「看護領域が小児・助産教育など特殊でないもの」とし、最終的に28件を分析対象とした。なお、文献の抽出プロセスについて図1に示した。

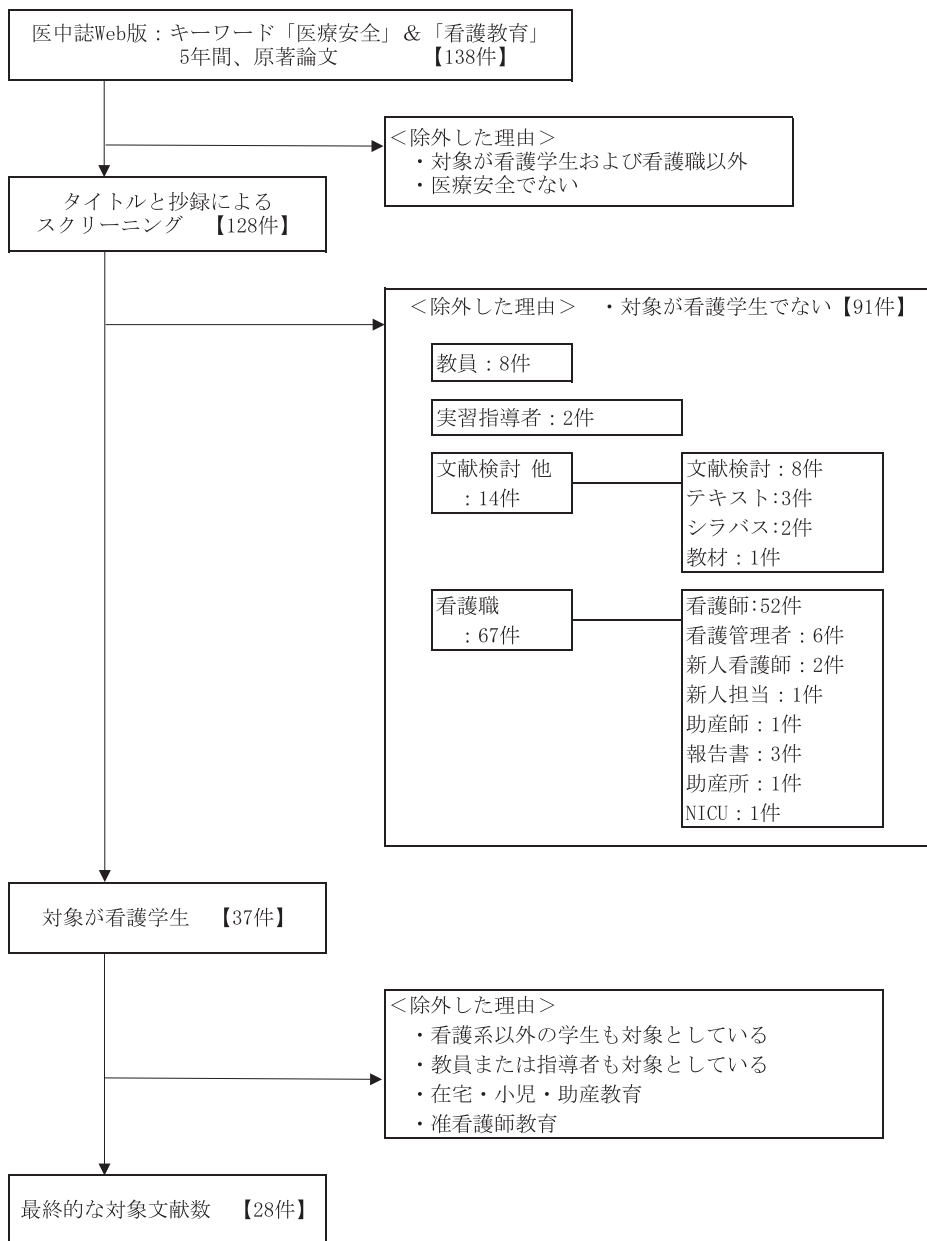


図1 文献抽出のプロセスと文献数

2. 分析方法

文献のレビューシートを作成し、研究筆頭者・発表年、研究目的、研究方法（対象者、研究デザイン、分析方法）、研究結果を分類・整理した。研究結果を精読し、内容の類似性に基づいてカテゴリー化し、テーマを生成した。

II. 結 果

分析対象の28件の文献レビューを表1に示した。文献の発表年の推移は、2016年6件、2017年5件、2018年5件、2019年8件、2020年3件、2021年1件であった。研究方法は、質問紙による調査15件（うち4件は尺度調査）、学生の学びレポート分析7件、インシデントレポート分析4件、面接調査2件（うち1件はレポート分析併用）であった。

文献内容の分析から、医療安全に関する演習評価および、看護学生の医療安全に対する意識・認識、インシデントレポートの分析、医療安全行動、リスク感性の5テーマ、10カテゴリーに分類された。

1. 医療安全に関する演習評価

医療安全に関する演習や研修評価を目的とした文献は11件で最も多く、これらの結果より、ロールプレイ、危険予知トレーニング（以下KYTという）、患者疑似体験教材、事事故例分析の4つのカテゴリーが抽出された。演習を実施した時期は、苧玉ら（2021）は3年課程卒業前、松江ら（2017）は大学4年次8月、落合ら（2018）は3年課程3年次9月、大学1年次は阿久津ら（2019）1件のみで、他6件は3年課程および大学の2年次であった。

ロールプレイは7件で、最も多かった。方法は、苧玉ら（2021）は患者急変時の初期対応など3つの場面を設定、阿久津ら（2019）はベッド周囲・転倒転落予防、山本ら（2018）は2つのシナリオによる指示受けスキル、松江ら（2017）は新人看護師の状況設定SBAR（状況：S、背景：B、評価：A、提案：R）活用による報告、落合ら（2018）は教員のロールプレイを見た後のリフレクション、米田ら（2017）はスタンマンによる疑似患者の車椅子移乗時の事故体験、本多ら（2019）は教員が患者役を演じるなど、様々な工夫をしていた。評価方法は、苧玉ら（2021）と山本ら（2018）は評価スケールを用いていたが、他5件は、演習後のレポートの内容分析で評価していた。

KYTは2件であり、方法は、佐藤ら（2018）は

ロールプレイとイラスト使用の2つ、蒲生ら（2017）は動画視聴であった。評価方法は、佐藤ら（2018）は術後初回歩行場面のKYTシートの内容分析により2つの方法による演習効果を比較し、危険要因からみた危険予知の傾向としてロールプレイの方がより多様に富んだ危険ストーリーを考えることができていた。蒲生ら（2016）は患者の日常生活動作に潜む危険の記述内容分析で評価し、「患者が自分の身体の状態を理解していない」「患者の身体機能に合わない環境」など5つのカテゴリーを抽出した。

患者疑似体験教材は、1件のみであった。研究者の開発した開腹術後患者疑似体験教材を用いて術後早期離床演習を実施し、ルートトラブル、転倒・疼痛の増強などにつながる状況に関する危険認識力が育成されたと体験後の学びを分析した。

事事故例分析は、1件のみであった。グループワークで都立広尾病院消毒薬誤投与医療事事故例をSHELLモデル（ソフトウェア：S、ハードウェア：H、環境：E、当事者以外の人：L、当事者：L）を用いて分析し、その発表内容により事例分析の有用性を検討した。学生は、提示しなかった内容も含めて、報告書にある対策に相当するおおよそを導き出すことができ、報告書にはないコミュニケーションや職場風土に関する原因と対策を学生の観点から考え、医療事故防止についての気づきができたと事例分析演習の有用性を報告していた。

2. 医療安全に対する意識・認識

看護学生の医療安全に対する意識・認識を明らかにしようとした文献は9件であり、これらの結果より、学年進行による意識の変化、実習時期を考慮した調査、安全意識と他のスキルとの関係性の3つのカテゴリーが抽出された。また、研究方法は、既存の尺度を活用しての測定分析は上野ら（2020）1件、面接法は今井ら（2019）1件、他7件は質問紙法による記述内容の分析だった。

学年進行による意識の変化は、4件あった。小林（2020）と細野ら（2018）は大学2～4年生、上野ら（2020）は3年課程3学年、今井ら（2019）は大学の1年生と4年生、有田ら（2016）は大学の4学年を対象として比較していた。細野ら（2018）はインシデントの発生は学年別では実習経験の多い上級学年ほど発生件数が多く、有田ら（2016）は「安全への関心の高さ」では2年生が4年生よりも高く、「慎重さ」は2年生が1年生および3年生よりも高く、ケア中の「自

中野他：看護基礎教育における医療安全教育に関する研究の動向と課題

表1 看護基礎教育における医療安全教育に関する文献レビュー

テーマ	カテゴリー	著者名 (発表年)	研究対象/ 研究方法	目的	結果
医療安全に関する演習評価	ロールプレイ	芋玉ら (2021)	看護専門学校3年生83名 アンケート調査 「研修過程評価スケール」	卒業前3テーマのシミュレーション研修効果の分析	・34項目の平均点は3.57点(1~5点評価) ・研修内容に関する項目の平均点は3.87点、教員の姿勢に関する項目の平均点は3.89点と高かった。 ・「時間配分の適切さ」「学生の緊張への配慮」の評価が他に比べ低かった。
		阿久津ら (2019)	1看護系大学1年生110名 演習後のワークシート分析(ベッド周囲環境・転倒転落)	学生がロールプレイ演習を通して、患者の安全な環境に気づくことができるかの検証	・ベッド周囲での気づき・学びでは、6サブカテゴリー、「個別性」「順序性」「患者の権利」「安全な療養環境」「清潔な療養環境」の5つのカテゴリーを抽出 ・転倒・転落での気づき・学びでは、9サブカテゴリー、「順序性」「個別性」「安全な療養環境」「清潔な療養環境」の4カテゴリーを抽出
		山本ら (2018)	1看護専門学校2年生120名 指示受けスキルSST評価調査	ロールプレイによる2つのシナリオ(A・B)での指示受けスキルの評価比較	・自己評価・他者評価ともにシナリオAよりBの方が優位に高かった。 ・臨地実習での実践予測は、シナリオAでは「うまくできる15名(17%)」少しはうまくできる70名(80%)、シナリオBでは「うまくできる22名(25%)」、少しはうまくできる63名(72%)であった。
		松江ら (2017)	1看護系大学4年生14名 SBAR講義後の学びのレポートの質的記述的分析	看護学生のSBAR活用演習による情報伝達の意義と方法の学びを明らかにする	・適切に情報を伝達する意義としては【医療事故の減少につながる】、他4項目 ・適切に情報を伝達する方法としては【共通ツールを用いて情報伝達する】、他3項目 ・相手から適切に情報を受ける意義としては【円滑なチーム医療、医療事故防止につながる】、他2項目・相手から適切に情報を受ける方法としては【情報の伝え手に伝達内容を確認する】、他2項目があった。
		落合ら (2018)	1看護専門学校3年生45名 SR体験後レポートの質的帰納的分析	教員のロールプレイを観察した学生の自己モニタリングレポート分析	・以下の10カテゴリーが生成された。 1) 過剰集中により限局した患者把握 2) 変化する患者の推論困難による最善策の選択難航 3) 患者に依存した援助選択と決行 4) 不確かな根拠による援助の決行 5) 実践中の援助の評価困難 6) 予想外の事態直面による否定的感情 7) 否定的感情に伴う脆弱化する患者把握 8) 明示性に欠く報告 9) 役割遂行困難によるチームワークの停滞 10) 自力で可能な援助の思案による看護者役割の遂行
		米田ら (2017)	1看護系大学基礎実習前2年生68名 演習前後の質問紙調査	スタントマンによる模擬患者車椅子乗降時の医療事故体験学習の効果を明らかにする	・医療事故の理解度(危険箇所の観察、事故の要因など)は、4項目とも演習後に高かった。 ・演習後は演習前に比べ、「危険箇所の認知回数」314→488へ増加。危険認知に関する記述は、「事故の要因」202→326、「起こりうる事故」112→162など増加した。
	KYT	佐藤ら (2018)	1看護専門学校の3年生37名 シミュレーション学習後の自己評価調査	医療安全シミュレーション学習における看護学生のリスク予見・リスク回避の実態調査	・患者Aの「患者情報」でリスク予見できた項目は、「酸素チューブの屈曲、接続はずれ」37名、「酸素流量の違い」34名、「内服の飲み忘れ・内服開始」24名・リスク回避できた項目は、「酸素チューブの屈曲、接続はずれ」29名、「内服の飲み忘れ・内服開始」12名、「酸素流量の違い」11名 ・患者Bの患者情報でリスク予見できた項目は、「誤嚥性肺炎で3回目の入院」31名、「物品破損・はずした義歯を湯飲みに入れてオーバーテーブルの隅に置いている」22名、「プリンを急いで食べる」18名 ・リスク回避できた項目は、「物品破損・はずした義歯を湯飲みに入れてオーバーテーブルの隅に置いている」7名、「プリンを急いで食べる」5名、「誤嚥性肺炎3回目」1名
			1大学看護学科の2年生102名 2つの方法による危険予知の傾向比較検討	イラスト群とロールプレイ群の術後初歩行場面でのKYT演習効果の比較	・記載された危険のポイント項目数はR群で35個、I群では32個・現象からみた危険予知の傾向として、R群では、疼痛、深部静脈血栓、出血、息苦しさなど、可視的な情報による現象だけではなく、体の内部で起こるであろうことを想起できた。また患者の思考および行動に起因する危険をイメージすることができた。 ・危険要因からみた危険予知の傾向として、R群では、より多様性に富んだ危険ストーリーを考えることができた。
		蒲生ら (2017)	1短大基礎看護実習終了した2年生151名 動画視聴後のレポート分析	動画視聴による事例の日常生活動作に伴う危険予知の傾向を明らかにする	・23のサブカテゴリー、「患者が自分の身体の状態を理解していない」「患者の身体機能に合わない環境」「麻痺により姿勢が不安定」「車椅子乗降時の援助が不適切」「患者のリネンや衣服に関する意識が不足」の5カテゴリーが抽出された。
	患者疑似体験	林 (2019)	1看護専門学校2年生76名 学生の学びレポートの分析	開腹術後患者疑似体験教材を用いた術後早期離床演習による学生の学びを明らかにする	・22サブカテゴリー、4カテゴリー、2大カテゴリーに統合 ・育成された術後早期離床援助時の危険認識力はルートトラブルにつながる状況、転倒につながる状況、患者自身で前方の危険認識がされていない状況、疼痛の増強につながる状況、寝衣がはだけ羞恥心につながる状況であった。 ・危険認識と危険回避の方法の間に存在する危険回避の判断についての記述はなかった。

表1 看護基礎教育における医療安全教育に関する文献レビュー（つづき）

テーマ	カテゴリー	著者名 (発表年)	研究対象/ 研究方法	目的	結果	
医療安全に関する演習評価	医療安全に	山岡ら (2017)	1 看護専門学校2年生36名 グループワーク発表内容分析	SHELL モデルを用いた事医療故事例（都立広尾病院事故）分析の有用性の検討	<ul style="list-style-type: none"> データ202個, S(ソフトウェア)60, H・E・L・Lは30~37個, 原因は95, 対策は107個だった. 学生は, 提示しなかった内容も含めて, 報告書にある対策に相当するおおよそを導き出すことができていた. また, 報告書にはないコミュニケーションや職場風土に関する原因と対策を学生の観点から考え, 医療事故防止についての気づきをしていた. 	
	学年進行による意識の変化	医療安全に対する意識・認識	小林 (2020)	1 看護系大学の2~4年生194名 質問紙調査	学生が臨地実習において遭遇した医療安全を考えた場面や現象と学生の安全意識を知る	<ul style="list-style-type: none"> 臨地実習場面で学生の多くが安全と感じた場面は, 薬剤管理場面であり, 危険と感じた場面は, 転倒・転落の場面であった. 臨地実習でのインシデント等の経験は, 各学年共に「移乗・移送」が多かった. 安全への関心については, ほぼ全ての学生が高まったと回答し, 実習前オリエンテーション時の医療安全ガイダンスは約9割の学生が活かせたと答えていた.
			今井ら (2019)	看護系大学生1年生と4年生(各5名) 面接内容を構造化, 両者の認識を比較検討	看護学生の高齢患者の身体拘束に対する認識の1年次と4年次の比較	<ul style="list-style-type: none"> 類似性としては, 【否定的な認識】を抱きつつも医療安全の観点から【身体拘束が必要な現状】を認識し, 最終的な手段として【身体拘束に至る前の創意工夫】と【身体拘束中の苦痛緩和】を求めている. 独自性として, 1年生は【未経験でわからない】ながらも【臨床看護師から学ぶ】ことと【患者と向き合う倫理的態度】で探求しようとしていた. 4年生は【身体拘束の解釈には個人差がある】がゆえに【看護師の倫理観に対する批判的な見方】をしており, 【医療チームでの最終的な判断・対応】や【倫理的配慮】の必要性を認識していた.
			細野ら (2018)	1 大学看護学科の学生2~4年生189名 質問紙調査	実習におけるインシデント発生の実態とインシデントに対する学生の認識を明らかにする	<ul style="list-style-type: none"> インシデントの発生状況は, 99名中44件, 学年別では実習経験の多い上級学年ほど発生件数が多く, 「転倒・転落」「与薬」「学生の単独行動による看護ケア」が多かった. インシデントに対する認識で高いのは, ストッパーやセンサーのつけ忘れ, 学生単独による看護ケア, 個人情報の取り扱いに関するもので, いずれも発生件数の多い内容であった. インシデント防止策では, 「事前の確認」と「報告・連絡・相談」であった.
			有田ら (2016)	1 大学看護学専攻2009~2011年度の1~4年生319名 質問紙調査	学年別による安全の意識と学年進行による変化の実態を明らかにする	<ul style="list-style-type: none"> 安全の意識は, 「安全への関心の高さ」では, 2年生が4年生よりも高く, 「慎重さ」は, 2年生が1年生および3年生よりも高く, また4年生は1年生よりも高かった. ケアの前中後における危険認識において, ケア前の「行動計画立案時には危険の有無を考える」と「行動計画立案時には危険のない方法を考える」, ケア後の「援助の良し悪しに関わらず必ず振り返りをしている」と「実施の報告をしている」は, 4年次生は2年次生よりも低かった. ケア最中の「自分の技術不足で不安や緊張が高い」は2年次生の方が高かった. ケアの前中後における危険認識では, ケア中の「自分の技術不足で不安や緊張が高い」や「ケア最中でも他のことが気になる」の2項目が2年生の方が4年生よりも高かった.
	実習時期を考慮した調査	他のスキルとの関係性	西山ら (2019)	1 大学の看護学生80名 実習前と成人I・II実習終了後の意識調査	インシデントレポートに関する学生の意識調査	<ul style="list-style-type: none"> 実習前, 急性期・慢性期実習後の変化は(前→急性期・慢性期) インシデントレポートを知っているか58→94.89%, 書いたことがある9%, インシデントレポートを書いたことが教訓となり今まで以上に気を付けるようになった19名中19名 実習で冷やりとした経験はあったか20.15%, インシデントレポートの必要性を実習に行って理解できた69.73%
			川村ら (2019)	2 校の看護専門学校の統合実習以外を終了した3年生151名 質問紙調査, 集計と内容分析	インシデントレポート記載, 安全カンファレンスの指導に対する学生の思いとその理由を明らかにする	<ul style="list-style-type: none"> レポートの記載経験があるのは76名(59%), ないのは52名(41%) レポートの記載は危険予知や回避能力の向上につながったと思うかは, 肯定83%. その理由として「責任の自覚, 自己の傾向や課題に気づく」などの4カテゴリーを抽出・安全カンファレンスに対し92%の学生が危険予知や回避能力の向上に繋がっていると回答. その理由として「事例共有の場を得る」などの8カテゴリーを抽出
			柘野 (2016)	1 大学看護学部3年生63名 実習ガイダンス終了時の質問紙調査	臨地実習前の医療安全に対する認識を明らかにする	<ul style="list-style-type: none"> インシデント・アクシデントの意味を理解していない13% 実習中の事故の不安がある91% 不安な技術がある91%, 移乗移送4% 自信のある技術がある80%, 清潔の援助15% 事故を起こさないための準備をしていた45%, 技術練習22%
	上野ら (2020)	1 看護師養成所の1~3年生233名 尺度調査の学年別比較	看護学生の日常生活スキルと医療安全意識の学年進行による相違の検討	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活スキル下位尺度のうち, 3年生が1・2年生に比べて有意な高値を示したものは「情報要約力」「親和性」「リーダーシップ」「対人マナー」 安全意識下位尺度のうち3年生が1・2年生に比べて有意な高値を示したものは「黙従性」「注意深さ」「安全への配慮」 3年生が2年生に比べて有意な高値は「安全への関心」 2年生が3年生に比べて有意な高値は「実習の緊迫感」 		

分の技術不足で不安や緊張が高い」や「ケア最中でも他のことが気になる」の2項目が2年生の方が4年生よりも高かったと2年生の意識が高いことを報告して

いる. また, 今井ら(2019)は高齢者の身体拘束に限定して検討し, 1年生は「未経験でわからない」ながらも「臨床看護師から学ぶ」ことと「患者と向き合う

中野他：看護基礎教育における医療安全教育に関する研究の動向と課題

表1 看護基礎教育における医療安全教育に関する文献レビュー（つづき）

テーマ	カテゴリー	著者名 (発表年)	研究対象/ 研究方法	目的	結果
医療安全に対する意識・認識	他のスキルとの関係性	蒲生ら (2016)	1 短期大学看護学科の基礎看護実習Iを終了した学生206名質問紙調査, 因子分析	看護学生の学習スキルと医療安全管理意識の関係の検討	<ul style="list-style-type: none"> ・学習スキル因子は、「集中する力」「自己学習する力」「技術全体をつかむ力」の3つを抽出・医療安全管理意識因子は、「他者との関わりで気づく」「患者の姿勢に注意」「器具の操作に注意」「誤認防止」「情報閲覧時に注意」「環境に注意」「自己の行動に注意」が抽出 ・学習スキルの「集中する力」は、医療安全管理意識の「患者の姿勢に注意」「誤認防止」と相関を示した。 ・学習スキルの「自己学習する力」は、医療安全管理意識の「他者との関わりで気づく」「器具の操作に注意」「環境に注意」と相関を示した。 ・学習スキルの「技術全体をつかむ力」は、医療安全管理意識の「他者との関わりで気づく」「患者の姿勢に注意」「器具の操作に注意」「誤認防止」「環境に注意」と相関を示した。
インシデントレポートの分析	インシデントレポートの分析	福森 (2019)	1 看護専門学校の見学ハット事故報告書42枚(3年度生3年間ずつ)の分析	3年度生3年間分の報告書の人的要因の分析による恐怖心を煽ることのない安全教育の検討	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒヤリハット・事故が生じた要因として最も多かったのは「判断誤り」で31枚(73.8%), 以下、「確認不足」25枚(59.5%), 「認識不足」15枚(35.7%)の順 ・「判断誤り」は学年進行につれ3→9→19件と増加傾向
		山口ら (2017)	1 看護専門学校平成23~27年度の臨地実習中のインシデント・アクシデントの分析	過去5年間の臨地実習中のインシデント・アクシデントの分析	<ul style="list-style-type: none"> ・発生件数は、平成23年度と24年度はそれぞれ10件、14件、25年度は28件、以後は減少傾向にあった。 ・インシデント80件、アクシデント11件 ・発生時の援助項目(日常生活の援助46件)別の件数では、「清潔」17件で最も多く、次いで「移送・移動・体位変換」が15件。その他、情報・記録25件、物品破損13件など45件 ・実習記録に関しては、ソーシャルネットワーク(LINE)を介したケースが増加傾向にあった。
		仲下ら (2017)	1 大学看護学部2008から2015年度の看護学生が提出したインシデントレポート分析	過去8年間の学生が提出したインシデントレポート分析	<ul style="list-style-type: none"> ・インシデント発生件数は計41件であり、「個人情報の保護」に関するものが8件と最も多く、次いで「転倒・転落」4件「転倒リスク」「安静度の制限を超えた行動」「医療器具の取扱い」「食事・水分摂取」それぞれ3件ずつであった。 ・他者による指摘で21件のインシデントの発生が把握されていた。 ・インシデントの発生の原因は「判断誤り」が29件(70.7%)と最も多く、「指導者への報告・連絡・相談の不足」23件(56.1%)「知識不足」15件「観察不足」10件「技術の未熟」8件などであった。
		上松ら (2016)	1 看護系大学の基礎看護学実習IIの18のインシデントレポートの分析	基礎看護学実習IIの18のインシデントレポートのSHEL分析表を用いた分析	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の18.9%が経験していた。 ・7サブカテゴリー、【対象の安全・安楽】13件(72.3%), 【物品の破損】1件(5.6%), 【個人情報保護】1件(5.6%), 【その他】3件(16.7%)の4カテゴリーが抽出された。
医療安全行動	医療安全行動	石渡 (2020)	1 看護系大学の3年生81名、54名の学生の学びのレポート及び7名の面接	手術見学実習の学びと、受け持ち患者の術後看護へ及ぼした影響の分析	<ul style="list-style-type: none"> ・23のサブカテゴリー、と「患者の配慮した手術室の環境整備」などの8つのカテゴリー、「環境整備」「感染管理」「安全」「麻酔」などの8つのコアカテゴリーが生成された。 ・手術見学実習が術後看護に影響したこととして、「病床環境整備の重要性」「感染予防の徹底」「術後患者の安全を守るケア」「早期離床のケア」「呼吸器合併症のケア」などの10カテゴリーが生成された。
		梅原ら (2019)	1 看護専門学校3年生85名質問紙調査(自由記述の内容分析)	医療安全の講義内容や教員・指導者からの助言の実習での活用状況の分析	<ul style="list-style-type: none"> ・実習で活用できた医療安全教育の内容は、16のサブカテゴリー、「援助時の安全対策」「環境整備における危険予知」などの7つのカテゴリー ・実習中に学生が実習指導者・教員から助言され活用した内容は、27のサブカテゴリー、「援助時の安全対策」「病棟・実習におけるルールの確認」などの8カテゴリー
		中村ら (2016)	1 短大看護学科3年生36名質問紙調査	統合実習での看護師の優先順位判断場面からの学びレポートの分析	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の学びとして、【看護過程展開能力】【時間管理能力】【臨床実践能力】【ニーズの充足を優先する能力】【生命の危機管理能力】【チーム役割の遂行能力】【医療安全と危険予知能力】の7カテゴリーが抽出された。
リスク感性	リスク感性	高木 (2018)	1 看護専門学校1年生40名、2年生45名、3年生34名尺度質問紙調査	看護学生の学年別リスク感性の実態を明らかにする	<ul style="list-style-type: none"> ・学年毎の平均点は1年生86.9点、2年生82.1点、3年生93.3点 ・学年間での比較では、3年生と1年生で、3年生と2年生で平均点に有意差あり、2年生と1年生では有意差なし。 ・因子毎の平均点では、3年生と1年生では、リスク体験活用力、リスク察知観察力、3年生と2年生では、リスク回避準備力、リスク対応準備力で有意差あり、臨地実習での体験が関連している項目だった。2年生と1年生では、リスク察知観察力で有意差あり。

倫理的態度」で探求しようとしており、4年生は「身体拘束の解釈には個人差がある」がゆえに「看護師の倫理観に対する批判的な見方」をしており、「医療チームでの最終的な判断・対応」や「倫理的配慮」の必要性を認識していたと、看護学生の経験と学習を通して看護職としての倫理的態度が育まれていると示唆

した。

実習時期を考慮した調査は、3件であった。西山ら(2019)は大学生実習前と成人看護学実習IおよびIIの終了後、川村ら(2019)は3年課程統合実習以外を終了した時期、柘野(2016)は大学3年生の実習ガイダンス終了時に調査していた。また、蒲生ら(2016)

は基礎看護学実習Ⅰ終了時に調査していた。西山ら(2019)は、実習でひやりとする経験をしたり、インシデントレポートを書くなどにより、約7割の学生がインシデントレポートの必要性を実習に行き理解できたと報告した。また、川村ら(2019)は、8割以上の学生がレポートの記載は危険予知や回避能力の向上につながり、安全カンファレンスも危険予知や回避能力の向上に繋がっていると回答したとそれらの重要性を報告している。

安全意識と他のスキルとの関係性は、2件であった。上野ら(2020)は日常生活スキルと医療安全意識の関係性の学年進行による比較、蒲生ら(2016)は学習スキルと医療安全管理意識に関する関係性を検討していた。上野ら(2020)の日常生活スキルとは、「効果的に日常生活を過ごすために必要な学習された行動や内面的な心の動き」を測定する尺度であり、計画性や情報要約力などの個人的スキルと、親和性やリーダーシップなどの対人スキルの24項目からなる。これらの尺度を活用し、日常生活スキル下位尺度のうち3年生が1・2年生に比べて有意な高値を示したものは「情報要約力」「親和性」「リーダーシップ」「対人マナー」、安全意識下位尺度のうち3年生が1・2年生に比べて有意な高値を示したものは「黙従性」「注意深さ」「安全への配慮」だと報告した。

また、蒲生ら(2016)は学習スキルとして看護技術の自己練習や講義・学内実習時の学習についてなど63項目を調査し、学習スキルの「集中する力」は、医療安全管理意識の「患者の姿勢に注意」「誤認防止」と相関を示した。学習スキルの「自己学習する力」は、医療安全管理意識の「他者との関わりで気づく」「器具の操作に注意」「環境に注意」と相関を示し、学習スキルの「技術全体をつかむ力」は、医療安全管理意識の「他者との関わりで気づく」「患者の姿勢に注意」「器具の操作に注意」「誤認防止」「環境に注意」と相関を示した。

3. インシデントレポートの分析

看護学生の記載したインシデントレポートを分析した文献は、4件であった。これらは、インシデント件数の他、発生場面・内容および発生要因について分析していた。インシデント件数は、研究対象の教育機関別では、福森(2019)は3年課程の入学年度の異なる学生のそれぞれ3年間の合計で42件、山口ら(2017)は大学の過去5年間で91件であり、その内訳はインシデント80件、アクシデント11件であった。仲下ら

(2017)は大学の過去8年間で41件、上松ら(2016)は大学2年生基礎看護学実習時の18件であった。

発生場面・内容については、山口ら(2017)では、全体91件中46件が日常生活の援助場面であり、その中で清潔17件、移送・移動・体位変換15件と多かった。その他、情報・記録25件、物品破損13件と続いた。また、仲下ら(2017)でも、全体41件中8件が個人情報の保護に関するものであった。上松ら(2016)は対象の安全・安楽13件(72.3%)と高かった。福森(2019)は発生場面については分析していなかった。山口ら(2017)は、厚生労働省の「重要事例情報の分類項目」を参考に分析していた。また、仲下ら(2017)では、発生年度別、臨地実習科目別および発生時の状況分析を行っており、発見者は本人20件であり、41件中21件が他者による指摘によりインシデントの発生が把握されていた。発生時に指導者の存在なし34件と報告していた。

発生要因については、福森(2019)は、判断誤りが31件(73.8%)、確認不足25件(59.5%)と多かった。仲下ら(2017)でも、判断誤りが29件(70.7%)で最も多く、指導者への報告・連絡・相談の不足23件(56.1%)、知識不足15件(36.6%)が続くと報告している。福森(2019)では、判断誤りは学年が進行するにつれて増加していた。

4. 医療安全行動

看護学生の医療安全行動に関する文献は、3件であった。石渡(2020)は、手術室見学実習での学びを分析し、その学びが周手術期看護実習における受け持ち患者の術後看護へどのように影響したかを明らかにした。手術室実習での学びの8つのコアカテゴリーの中に「患者の安全を守るための看護」があり、サブカテゴリーとして、「転倒・転落予防」「ダブルチェックの重要性」など4つが抽出された。そして、手術見学実習が術後看護に影響したこととして10カテゴリーが生成され、「術後患者の安全を守るケア」「早期離床のケア」という2つの安全管理に関するカテゴリーが抽出された。

梅原ら(2019)は、学生が臨地実習で活用した医療安全に関する既習内容、および実習指導者と教員の助言内容を明らかにした。実習で活用できた医療安全教育の内容は、16のサブカテゴリー、「援助時の安全対策」「環境整備における危険予知」などの7つのカテゴリーであった。実習中に学生が実習指導者・教員から助言され活用した内容は、27のサブカテゴリー、

「援助時の安全対策」「病棟・実習におけるルールの確認」などの8カテゴリーであった。

中村ら（2016）は、統合実習において複数患者を受け持つ看護師がケアの優先順位を判断していた場面から学んだこと」のレポートを内容分析により、学びの構造を明らかにした。学生の学びとして、「看護過程展開能力」「時間管理能力」「臨床実践能力」「ニーズの充足を優先する能力」「生命の危機管理能力」「チーム役割の遂行能力」「医療安全と危険予知能力」の7カテゴリーを抽出した。「医療安全と危険予知能力」のサブカテゴリーとして、医療安全管理能力、感染リスク管理能力が抽出され、医療安全対策、転倒・転落防止対策、災害時の対策、感染対策の実施、および感染症の情報収集の5つの判断材料を示した。

5. リスク感性

看護学生のリスク感性の実態に関する文献は、高木（2018）1件のみであった。既存のリスク感性測定尺度を用いて調査した。調査時期の学生の状況は、3学年ともに学内講義中であり、直近の臨地実習経験は、3年生は実習終了直後、2年生は6か月前、1年生は1か月以内だった。学年毎の平均点は1年生86.9点、2年生82.1点、3年生93.3点であった。

学年間での比較では、3年生と1年生で、3年生と2年生で平均点に有意差あり、2年生と1年生では有意差はなかった。6つの因子毎の平均点では、3年生と1年生では、「リスク体験活用力」「リスク察知観察力」、3年生と2年生では、「リスク回避準備力」「リスク対応準備力」で有意差あり、臨地実習での体験が関連している項目だった。2年生と1年生では、「リスク察知観察力」で有意差があった。3年生は学習進度と実習による経験値からリスク感性が高いと報告した。

Ⅲ. 考 察

1. 医療安全に関する演習評価

今回の対象とした28文献10カテゴリーの中ではロールプレイが7件で最も多く、シナリオ作成、動画、疑似患者、疑似体験、KYTなど、学内演習により臨床現場を想定した環境で学生にリアル感を感じさせる工夫をしていた。指定規則の改訂により教科目数は増えても実習時間数は変わらない状況において、学生により臨場感を感じさせるため、苧玉ら（2021）、阿久津ら（2019）、松江ら（2017）、米田ら（2017）および

林（2019）はシミュレーション演習の効果の検証に取り組み、「緊張感を伴う実践的な研修となった」「患者および看護師としての共感性が育成された」など、いずれも演習による効果を明らかにしていた。今後も情報通信技術（ICT）を活用した教材の開発やその評価が期待される。また、臨床でのリアリティーショックを和らげる目的で演習時期を考慮し、米田ら（2017）は基礎看護学実習前の大学2年次、苧玉ら（2021）は卒業前に実施していた。

WHO（2011）では「患者安全の教育と学習に不可欠な教育原理」の中に、医療従事者の日常業務と関連づけて教える、多くの学生にとって一般的で関連性のある環境や状況を利用する、学生にとって興味深いもしくはすぐに関わることになる事例を用いることが、学生の理解が深まり学習に対する意欲を増すことができると有用な戦略を示している。安全という概念を学生にとって身近な問題として関心を持たせることは重要な動機づけになる。看護学生は看護を学ぶ初心者であると同時に一人の生活者でもあり、自身の日常生活の中から安全を意識させることが医療安全を学ぶ上で効果的であると考えられる。

看護学生の患者への実際の援助行為としては療養上の世話に関する行為が多く、医療技術の高度化、患者の人権の尊重の重要性などから診療の補助行為の経験の機会が少ないのが現状である。しかし、厚生労働省（2014）新人看護職員研修ガイドラインでは、療養上の世話だけでなく診療の補助行為を含めた70項目の看護技術のうち40項目を1年以内の到達を目指すとし、筋肉内注射や点滴管理などの与薬の技術、救命救急処置技術、静脈血採血など研修プログラム例を示しており、各施設で研修が実践されてきた。嶺肩ら（2021）は、新人看護師対象に6月に実施した「点滴静脈注射の管理に関連するトラブルと対処方法」研修を紹介し、既存の知識や経験を具体化する支援の重要性を述べている。新人看護師として入職すると診療の補助行為技術は当初より求められている状況であり、臨地実習では経験する機会が少ない援助項目について見学の機会を多く設けたり、シミュレーション機器の活用など、今後もさらなる教育方法の検討・工夫が必要である。

今回医療安全に関する演習評価のテーマに分類した11文献は、教育方法や教材の開発、ノンテクニカルスキルの重要性などに関する研究であり、臨床での行動力の獲得を目指していると考えられるが、それらの学習成果を実践的な行動としてどのように評価するか

は明らかでなく今後の課題である。

2. 医療安全に対する意識・認識

学年進行による学生の医療安全に対する意識の変化に関する文献が4件であった。学年が進行するにつれてインシデント発生件数が増えるが、同時に臨地実習で体験の積み重ねに伴い看護職としての倫理的態度が養われ、インシデントレポートの記載や安全カンファレンスを経験することにより学生の危険予知や危険回避能力の向上につながっていた。日常生活スキルと医療安全意識との関係性も学年が高いほど意識も高いという結果であり、日常生活での安全意識の啓発が重要だと報告していた。西山ら(2019)はインシデントレポートを書いた経験のある学生19名全員が、この経験が教訓となり今まで以上に気を付けるようになったと報告しており、インシデントの経験は貴重な機会として活かされている。一方、経験していない学生への動機づけをどのように行うべきか、また、学生のインシデント事例を他の学生や教員たちとどのように情報共有していくかも重要な課題である。

3. インシデントレポートの分析

インシデントレポートの分析は4件であった。そのうち1件が、レポート内容の分類に厚生労働省の医療安全対策ネットワーク整備事業「重要事例情報の分類項目」を参考にしたことを示していたが、それぞれの教育機関での事故対応やインシデントレポート記載や報告に関する基準が同じではないと思われる。今後はこれらの基準に関する考え方の検討が必要だと考える。日本看護協会(2016)は、学生の起こしやすい医療事故として、患者の転倒・転落への関与、患者の私物や医療機関の備品の破損、記録物の紛失などの個人情報保護に関する事故などを挙げているが、今回の4件でも分析方法は異なるが、同様のインシデント内容の結果であった。

福森(2019)は、学生が事故を恐れるあまり自身で判断する思考を停止させたり、必要な援助の提供を敬遠したりする傾向があることに対し、インシデントレポートの人的要因に焦点を当て、学生の恐怖心を煽ることのない教育方法を検討することを目的として研究に取り組み、実習指導者による学生と患者の良好な関係の調整や、指導者がアサーティブなコミュニケーション能力を發揮し学生のコミュニケーション能力の育成を図ることが必要だと報告した。WHO(2011)では、学んだことを実践につなげるためには、学生が

「安全で支援的な学習環境である」と感じられることが、学習意欲を持ち困難な課題にも楽しみながら取り組み、学習活動に積極的に参加する。そう感じられない場合は、自分の知識不足を気にしたり恥をかくことを恐れるあまり、学習よりも自己防衛になってしまうと述べており、指導者は学生の学習環境を整える役割の大きいことを強調している。学生がインシデントレポートの意義について理解し、その必要性を認識して臨地実習に臨むことができるよう準備することが重要である。

4. 医療安全行動

今回対象とした文献の中で学生の医療安全行動に分類した研究は、3件だった。石渡(2020)は、手術室見学実習での学びを分析し、その学びが周手術期看護実習における受け持ち患者の術後看護へ影響したこととして「術後患者の安全を守るケア」「早期離床のケア」という2つの安全管理に関するカテゴリーを抽出した。また、梅原ら(2019)は、学生が臨地実習で活用した医療安全に関する既習内容、および実習指導者と教員の助言内容を明らかにした。実習で活用できた医療安全教育の内容は、「援助時の安全対策」「環境整備における危険予知」などの7つのカテゴリー、実習中に学生が実習指導者・教員から助言され活用した内容は、「援助時の安全対策」「病棟・実習におけるルールの確認」などの8カテゴリーとし、実践的な行動につながったことを評価していた。

WHO(2011)では、学生が安全な業務の実践を経験すると、その学びが行動として習慣となり、学生は患者安全により一層注意する心構えで取り組むことができる。学んだ知識と技能を応用する機会を与えることの重要性を強調している。2019年度末よりのコロナ禍の状況下、多くの教育機関は臨地実習に何らかの制約を受け従来の実習時間が減少している現状において、今後さらに学内での学習を実践的な行動として結びつける教育のあり方の検討が期待される。

5. リスク感性

高木(2018)は、既存のリスク感性測定尺度を用いて3学年度比較し、3年生は学習進度と実習による経験値からリスク感性が高いと報告した。看護学生の倫理や医療安全に関する感性など、本来学生が持つ人間としての特性に関わることであり、感性をどのような方法で育むことができるか難しい課題である。チームで質の高いケアを提供するために、看護基礎教育の段

階から医療安全文化の醸成を意識でき、医療安全におけるノンテクニカルスキルの習得も重要な課題だと考える。

WHO (2011) には、教育・研修に導入できるトピック形式の患者安全教育プログラム 11 個「①患者安全とは、②患者安全におけるヒューマンファクターズの重要性、③システムとその複雑さが患者管理にもたらす影響を理解する、④有能なチームの一員であること、⑤エラーに学び、害を予防する、⑥臨床におけるリスクの理解とマネジメント、⑦患者や介護者と共同する、⑧質改善の手法を用いて医療を改善する、⑨感染の予防と管理、⑩患者安全と侵襲的処置、⑪投薬の安全性を改善する」が集録されている。小林 (2014) は、トピックの①～⑧はノンテクニカルスキルの観点からの教育内容であり、医療に関係する全ての職種が患者安全に関する知識・技術を共通理解する教育の必要性を示していると述べており、看護基礎教育機関での安全教育にこれらのカリキュラムガイドの活用を期待している。そして、医療は関係職種すべてが連携することで初めて安全が確保され、学生の中から教育をともにすることで実践において円滑な関係性を築くことにつながると、学生もチームの一員としての教育が重要だと考えていた。学生がチームの一員という立場や役割を理解し意識することができれば、医療安全は個人だけではなく組織全体で取り組むことの重要性を理解することにつながると考える。

6. 看護基礎教育における医療安全教育の課題

1) 医療安全教育の位置づけ

2009 年、保健師助産師看護師学校養成所指定規則が改正され、統合分野として「看護の統合と実践」が設けられ、教育内容として医療安全の基本的知識の習得が明文化された。小林 (2014) は、医療安全教育を教育課程の 1 科目として位置づける看護系教育機関が増加しており、看護職が医療・福祉の場で求められる業務がますます拡大し多様化する中で、医療安全についての意識・技術を習得しないと患者と学生の安全を確保できない状況が現出していることが大きな要因を考えると述べている。日本看護系大学協議会 (2018) は、「安全なケア環境を提供する能力とは、事故の危険性を認識し医療事故防止策や安全環境管理、感染予防対策を理解し、そのために必要な行動をとることができる能力のことである」と述べ、卒業時の到達目標のための教育内容として、「組織的医療安全管理における役割」「医療安全管理」「感染防止対策」の 3 つの

大項目とさらに 12 の内容を示している。前述の位置づけと同じくそれぞれの教育機関の教育目的を踏まえた教育内容や方法の検討、および教員間での共通理解が必要であると考えられる。

2) 臨床実習施設との連携

医療安全は一つひとつの看護ケアと同じく、安全確保のための予防行動や事故対処行動など、具体的な実践行動が求められている。看護基礎教育における臨床実習は受け持ち患者の看護展開が主要な目的であるが、看護を学ぶ早い段階から学内での講義や演習を通して、臨床実習前の安全に対する認識を深め、実践レベルの行動につなげる医療安全教育が重要である。日本看護系大学協議会 (2019) は看護学実習ガイドラインの中に、専門科目としての看護の知識・技術・態度の統合を図りつつ、実践へ適応する能力を育成することを目的とし、多様な対象の援助を通して対人関係形成能力を養い、看護専門職としての批判的・創造的思考力と問題解決能力の醸成、高い倫理観と自己の在り方を省察する能力を身に付けることを目指すと臨床実習での学びの重要性を説明している。教育機関の教員と実習指導者との連携を図り学生の実習環境を整えていくことが重要であり、教育機関の大きな役割であり課題である。

3) 看護学生の医療安全行動の評価

現職看護師の医療安全行動に関する研究は多く報告されているが、看護学生を対象とした医療安全行動の評価指標や尺度に関する研究は行われていない。看護学生がどのような行動をとることができれば患者の安全を確保できるのか、ひとり一人の行動を評価することにより、それぞれのもつ課題が明確になり具体的な学習活動につながることを期待できる医療安全行動の評価指標や尺度の開発など今後の課題である。今後、看護学生の卒業時に求められる医療安全行動を明確にし、その行動力習得のための看護基礎教育課程における医療安全教育のあり方の模索が求められる。

IV. 結 論

対象とした文献 28 件のうち 11 件は医療安全技術習得の演習を評価したものであり、臨床を想定した環境づくりや教材など様々な教育方法を工夫し、学生の危険予知やリスク回避行動につなげることを目的としていた。看護学生は実習を積み重ねることによりインシデント事例を体験する機会も増え、医療安全への関心や意識が高まり、看護職としての倫理的態度が育まれ

ていた。今回医療安全行動のカテゴリーに3文献を分類したが、医療安全教育の目的は安全のために具体的に行動できることである。今後さらに学内で習得した医療安全に関する知識や技能を実践的な行動として結びつける教育のあり方や評価を検討する必要がある。

本研究は、選択条件に合致した対象文献28件からの検討であり限界がある。今後、看護基礎教育における医療安全教育に関する教育課程、教員や実習指導者、学習環境など、多くの視点を踏まえて検討していく必要がある。

利益相反の開示

本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

- 阿久津滝子, 松本政人, 近藤邦, 他. 安全管理技術の演習評価: 学生のワークシートの記述分析. 日本看護学会論文集. 看護教育 2019; 49: 119-22.
- 有田広美, 笠井恭子. 看護学生の医療安全意識に関する研究. 福井県立大学論集 2016; 46: 23-32.
- 蒲生澄美子, 所ミヨ子, 関口恵子, 他. 臨地実習後の看護学生(2年次生)の危険予知の傾向: 動画による事例を視聴して. 埼玉医科大学短期大学紀要 2017; 28: 87-96.
- 蒲生澄美子, 所ミヨ子, 関口恵子, 他. 看護学生の学習スキルと医療安全管理意識の関係. 埼玉医科大学短期大学紀要 2016; 27: 65-79.
- 林さえ子. 「開腹術後患者疑似体験教材」を用いた術後早期離床演習の医療安全教育としての有効性. 愛知県看護教育研究学会誌 2019; 22: 10-16.
- 本多可織, 松浦美代, 伊藤睦美. 医療安全シミュレーション学習における看護学生のリスク予見・リスク回避の実態. 医療の広場 2019; 59(3): 35-8.
- 細野恵子, 鈴木里奈, 武市千穂, 他. 看護系大学生の臨地実習におけるインシデント発生の実態とインシデントに対する学生の認識. 旭川大学保健福祉学部研究紀要 2018; 10: 45-53.
- 福森茂樹. 恐怖心を煽ることのない医療安全教育の検討: 看護学生のヒヤリハット・事故報告書の分析を通して. JCHO 東京新宿メディカルセンター附属看護専門学校紀要 2019; 4(1): 24-9.
- 伊藤正子, 舟島なをみ, 鈴木美和. 患者の安全保証に向けた看護師の対策と実践. 看護教育学研究 2006; 15(1): 62-75.
- 今井多樹子, 木村美月. 高齢患者の身体拘束に対する看護系大学生の認識: 1年次生と4年次生との比較から. 臨床倫理 2019; 7: 33-43.
- 井上理英, 堀薫夫. 看護学実習指導に対する学生の意識と臨床指導者と看護教員間の協働の意識に関する研究. 大阪教育大学紀要総合教育科学 2021; 69: 227-44.
- 石渡智恵美. 周手術期看護実習における手術見学実習が受け持ち患者の術後看護へ及ぼした影響: 周手術期看護実習における学習内容の検討. 帝京科学大学紀要 2020; 16: 89-96.
- 川村三加子, 小方美樹, 狩野由紀子, 他. 臨地実習におけるインシデント・アクシデントレポート記載: 安全カンファレンスの指導に対する学生の思い. 日本看護学会論文集看護教育 2019; 49: 87-90.
- 小林美雪. 基礎看護から始める医療安全教育. 看護 2014; 3月増刊号: 26-35.
- 小林美雪. 看護学生が臨地実習から学んだ医療安全に関する意識調査. 健康科学大学紀要 2020; 16: 73-84.
- 古村沙織, 松本智晴, 前田ひとみ. 臨地実習における看護学生の失敗に対する看護教員のかかわりとリスク感性との関係. 日本看護学教育学会誌 2021; 31(2).
- 厚生労働省. 看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書. 2003 [閲覧日 2021-11-10]. URL: <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html>
- 厚生労働省. 新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会報告書. 2004 [閲覧日 2021-10-20]. URL: <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/03/s0310-6.html>
- 厚生労働省. 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. 2011 [閲覧日 2021-10-20]. URL: <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf>
- 厚生労働省. 新人看護職員研修ガイドライン改訂版. 2014 [閲覧日 2022-03-10]. URL: <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000049472.pdf>
- 厚生労働省. 看護基礎教育検討会報告書. 2019 [閲覧日 2021-11-10]. URL: <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>
- 松江なるえ, 宮本千津子, 末永由理, 他. 看護学生のSBARを活用した演習による情報伝達の意義と方法の学び. 東京医療保健大学紀要 2017; 12(1): 77-84.
- 文部科学省. 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて: 看護学教育のあり方に関する検討会報告 2002.
- 文部科学省. 大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会最終報告. 2011 [閲覧日 2021-11-20]. URL: https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf
- 日本看護系大学協議会. 看護学士課程教育におけるコンピテンシーと卒業時到達目標. 2018 [閲覧日 2021-12-10]. URL: <https://www.janpu.or.jp/file/core competency.pdf>
- 日本看護系大学協議会. 看護学教育向上委員会看護学実習ガイドライン. 2019 [閲覧日 2021-11-10]. URL: https://www.mext.go.jp/content/20200114-mxt_igaku-00126_1.pdf
- 日本看護協会. 医療安全推進のための標準テキスト. 2016 [閲覧日 2021-12-20]. URL: <https://www.>

- nurse.or.jp/nursing/practice/anzen/pdf/text.pdf
- 西山円, 福岡珠美, 城内貴代美. 看護学生のインシデントレポートに対する意識について. 太成学院大学紀要 2019; 21: 79-86.
- 中村史江, 青山みどり, 杉原喜代美. 複数患者を受け持つケアの優先順位の判断: 統合実習による看護学生の学びの分析から. 日本看護学会論文集看護管理 2016; 46: 333-36.
- 仲下祐美子, 河野益美. 臨地実習における看護学生のインシデントレポート分析. 千里金蘭大学紀要 2017; 13: 77-84.
- 芋玉奈生子, 河合真紀子, 増山路子. シミュレーションを活用した卒業前医療安全研修の効果: 研修過程評価スケールの分析. 医療の広場 2021; 61(2): 39-41.
- 落合めぐみ, 秋元恵子. シミュレーション・リフレクション体験後の看護学生のノンテクニカルスキルの実態. 日本看護学会論文集看護教育 2018; 48: 15-8.
- 佐藤安代, 岡本佐智子, 萱場一則, 他. ロールプレイを用いた危険予知トレーニングの効果の検証: イラスト使用との比較. 保健医療福祉科学 2018; 7: 79-83.
- 塩霧都恵, 土屋八千代. 看護学生が臨地実習でインシデントを起こした後の教育的なかかわり: 看護学生・実習指導者それぞれの立場から検討する. 日本看護学会論文集看護教育 2016; 46: 151-54.
- 相撲左希子: 看護職のリスク感性概念の構築と尺度の開発. 国立国会図書館デジタルコレクション 2018.
- 高木佳寿美. 看護学生のリスク感性測定尺度を用いたリスク感性の学年別比較. 国立病院機構熊本医療センター医学雑誌 2018; 18(1): 134-38.
- 嶽肩美和子, 中村加奈子, 加藤恵子. 学生から新人看護師への移行期における医療安全教育. 看護教育 2021; 62(1): 28-34.
- 柘野浩子. 臨地実習前の看護学生の医療安全に対する認識と安全教育への課題と対策. 新見公立大学紀要 2016; 37: 85-8.
- 上松恵子, 松本幸子. 看護学生の臨地実習で生じたインシデントレポートの分析と医療安全教育の検討. 人間総合科学 2016; 30: 57-62.
- 上野妙子, 山田眞子, 前川昌代, 他. 看護学生の学年進行による日常生活スキルと医療安全意識の検討. 日本看護学会論文集看護教育 2020; 50: 43-6.
- 梅原美香, 池西悦子. 看護学生が臨地実習で活用した医療安全の既習内容と教員・臨床指導者からの助言. 日本看護学会論文集看護教育 2019; 49: 15-8.
- WHO. 患者安全カリキュラムガイド多職種版オリジナル版. 2011 [閲覧日 2021-12-10]. URL: http://meded.tokyo-med.ac.jp/wpcontent/themes/mededu/doc/news/who/WHO%20Patient%20Curriculum%20Guide_A_01.pdf
- 山口隆明, 田口恵美子, 藤本康乃, 他. 当校のインシデント・アクシデントの現状と医療安全教育の課題. 愛知県立総合看護専門学校紀要 2017; 11: 49-58.
- 山本恵美子, 田中共子, 兵藤好美, 他. 看護学生の正確な指示受けのためのソーシャルスキルトレーニング: 臨地実習で直面する困難状況を課題場面とした医療安全教育の試み. 応用心理学研究 2018; 44(1): 70-80.
- 山岡富美香, 福嶋洋子, 高下智香子. 看護基礎教育における医療安全 SHELL モデルを用いた医療事故事例分析の有用性について. 中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌 2017; 13: 283-86.
- 米田照美, 伊丹君和, 関恵子. 医療事故体験演習における看護学生の危険認知についての学習効果. 日本看護学教育学会誌 2017; 26(3): 59-69.